

平成28年7月

橋本市総合教育会議録（第1回）

平成28年7月28日

平成28年度 第1回総合教育会議録

開催日時 平成28年7月28日(木) 午前10時00分～

開催場所 橋本市教育文化会館 4階 第5展示室

出席者 市長 平木 哲朗
教育長 小林 俊治
教育長職務代行者 清田 信
教育委員 森田 知世子、 米田 恵一、 中尾 悦子

出席職員	総務部長	吉本 孝久	健康福祉部長	石橋 章弘
	教育部長	森中 寛仁	政策企画室長	上田 力也
	財政課長	小原 秀紀	こども課長	吉田 健司
	教育総務課長	櫻井 康雄	学校教育課長	辻脇 昌義
	文化スポーツ室長	大岡 康之	社会教育課長	水林 正美
	中央公民館長	海堀 不二夫	図書館長	井澤 清
	教育総務課主任指導主事	坂本 利一	教育総務課長補佐	兼井 和彦

1 開会

2 市長あいさつ

3 報告

橋本市の財政状況について(資料1)

4 議題

橋本市の教育について(資料2・資料3)

5 その他

[配布資料]

資料1 橋本市の財政状況

資料2 橋本市の教育

資料3 共育コミュニティについて

会議の概要

開会 午前10時00分

教育部長

皆さんおはようございます。定刻となりましたので、これより平成28年度第1回総合教育会議を開催させていただきます。

私は、今回事務局を務めます、教育委員会教育部長の森中でございます。議事に入るまでの進行をさせていただきますので、どうぞよろしくお願い致します。

まず、お手元の資料のご確認をお願い致します。右肩に資料1、資料2、資料3と書いている3つの資料がございますので、ご確認をお願い致します。不足している場合は、事務局の方からお届け致します。今回の時間につきましては、約1時間半程度を目処に終了していただければと考えておりますので、ご協力をよろしくお願い致します。

それでは、次第に従いまして会議を進めてまいります。

始めに、第1回橋本市総合教育会議の開催にあたりまして、平木市長よりご挨拶をお願い致します。

市長

皆さんおはようございます。

委員の皆様におかれましては、平成28年度第1回橋本市総合教育会議にご出席を頂きまして、誠にありがとうございます。

昨年度は、3回の会議を開催する中で「教育大綱」を策定することが出来ました。非常に熱心な議論をして頂きまして、あとはより一層、実効性のあるものに変えて行く・創り上げて行くということが大事で、私、計画だけで終わらせるのが嫌いなので、これからどういう形で進めて行くかというのをしっかりと教育委員さんあるいは教育委員会で議論をして頂きたいと思っております。

「橋本市の教育」の冊子もリニューアルされたということではありますが、どう変わったのか、まだよく見てないので分かりませんが、やっぱりこれからの橋本市の教育というのをいかに考えていくか、そしてやはり、子どもの貧困についての取組みをどう考えて行くか、そして、子育てから教育までの一貫した支援をどういうふうに考えていくのか、というのを仕上げて行く時期かなと思っております。家庭教育相談室も支援室をつくりましたが、まだ、箱は出来たが魂が入ってないというふうにも感じておりまして、議論についても報告を見ますと、いまいの議論だなと思っております。これから本当にどうするのかということ、しっかり考えて行かないといけないと思っておりますし、学校の問題でも、学校に来れない子どもたちをどうしていくのか、いじめの問題をどうしていくのか、不登校の問題をどうしていくのか、それを教育相談センターに丸投げしておいて良いのか、教育委員会としてどういった関わりをしていくのか、という話を先日も会議の中でさせてもらいましたが、より一層、子どもたちに対する支援を深めていくためにはどうするのかという意味で、これからより一層熱心に議論を頂いて、橋本市の教育が前に前に進んでいくようお願いしたいと思います。

今日は実のある意見と忌憚のないご意見を聞かせて頂いた中で、今日の第1回の

会議が実のあるものになりますようお願い申し上げまして、冒頭の挨拶とさせていただきます。

今日は本当にご苦勞様です。

教育部長

ありがとうございました。

次に、会議次第3の報告事項に入らせて頂きます。

まず始めに、「橋本市の財政状況について」財政課長の小原より説明いたします。

財政課長

(別紙「橋本市の財政状況について(資料1)」資料より説明)

教育部長

続きまして、教育委員会関係の予算につきまして、教育総務課長の櫻井より説明を致します。

教育総務課長

(別紙「橋本市の財政状況について」資料より説明)

教育部長

只今、市の財政状況につきまして、市の財政状況ならびに教育委員会の予算について報告がありました。この点につきまして、委員の皆様方から何かご意見、ご質問等はございませんでしょうか。

米田委員

よろしいでしょうか。

教育部長

どうぞ。

米田委員

その家庭教育支援推進費ってございますが、これはあくまで教育費の中での事だろうと思うのですが、教育と福祉が連携云々ということで始まっておりませんが、これは福祉部局においても、これに準じた予算取りはあるのでしょうか。

子ども課長

子ども課の中に家庭児童相談員というのがおりまして、1名嘱託で常勤で平成28年度から採用をしています。

米田委員

予算はどれくらいですか。

子ども課長

予算は嘱託1名分なので、約200万円の予算です。

ただ、27年度までは嘱託2名で、非常勤で週3日間勤務でしたので、同じような金額での予算です。常勤で、今回は連携担当です。

米田委員

ちょっと少ないような気がしましたから。

教育総合会議と全然違うことになるのですが、市債の引受信用機関はどこが引き受けてくれるのですか。利息は変動か固定か、大体何%くらいですか。

財政課長 引受については起債の種類によっていろいろありまして、銀行であったり、国の機関であったりいろいろあるのですが、その起債の種類によって変わります。それと利率についても国の場合は市場の金利と連動してまして、その年によって違うのですが、一番の最近の数字で言いますと、0.12ぐらいです。

米田委員 0.12。

財政課長 15年分ですが。

米田委員 過去のもの、昔もずっと変動で来ているわけですね。

財政課長 そうです。銀行の場合は、その時の入札で利率が決まるのですが。

米田委員 高いままの金利で払っているわけではないですね。

財政課長 高いままの分は、ある程度繰り上げ償還していますが、まあ若干。

米田委員 借り換えしたりもしてますか。

財政課長 そういうふうにしてます。直近の金利で言うと0.12ぐらいです。

米田委員 分かりました。

教育部長 他にありませんか。

清田委員 時間外勤務手当と賃金が他の市に比べて多い。これはもう少し分析した話を聞かせて頂きたいのですが。なぜ他の市に比べて、この辺りが多いのか。例えば人が多いとか、時間外でやる仕事が多いというのか、何か効率が悪いのか。

財政課長 他市に比べて多いという点で言いますと、橋本市はやっている事業が多いということがありますが、管理が甘かったということです。27年については適正な管理をしようということで、いろいろ取り組んでもらいまして、27年度は26年度に比べて6000万円削減したのですが、それでもまだ多い。課内・係内で、そういった時間外が本当に適正なのかという議論をして頂いて、ワークシェア等いろんな対策もして頂いて、時間外縮減については今後も取り組んでいきたいと自覚しております。

賃金に関して、これは人数が多いということですか。

清田委員

それもいろいろあるのですが、実は職員級という、1級、平の職員から部長の7

財政課長 級まであるのですが、橋本市の特徴で5級、6級、課長補佐級というランクがあるのです。この5級、課長補佐級の構成比が38%ぐらいありまして、他市には見られない、割と高額な職員の人数が多いというのがありますので、そういうところについても採用試験等を見直して、いろいろと財政課サイドから人事課サイドへも言っているんですが、バランスの取れた職級になるように、今後見直していただけるようなところですよ。

清田委員 今お聞きしたのは、我々も何か考えるとき、人がなんて考え出すと必ずこんなところに関係してきますので、ちょっとお尋ねしました。

教育部長 他にございませんか。無いようでしたら、報告事項については以上とさせていただきます。

続きまして、会議次第4の議題に入らせて頂きたいと思います。議題の議事進行につきましては、平木市長にお願いしたいと思います。よろしくお願ひします。

市長 はい。それでは議事の進行を務めさせていただきますので、よろしくお願ひします。まず本日の議事録署名者ですが、私の方から指名してよろしいでしょうか。

全員 はい。

市長 それでは米田委員、お願ひ出来ますか。

米田委員 はい。わかりました。

市長 よろしくお願ひ致します。

それでは、早速ですが議題に入ります。本日の会議の議題は、「橋本市の教育」についてとしています。まずこれについて、事務局より説明をお願いします。

学校教育課長 はい。学校教育課長の辻脇です。宜しくお願ひします。

(別紙「橋本市の教育」「共育コミュニティの現状」(資料2・資料3)資料より説明)

市長 はい。今、事務局の方から報告がありました。

今の説明の中で何か委員の皆様からご質問、ご意見等ございませんか。

共育コミュニティについては後ほど話しますので、今のこの冊子の中で何か質問が具体的にあればお願ひします。

よろしいですか。

それでは、先程、辻脇課長の方からありました「共育コミュニティ」をテーマにして、これからご意見を出して頂きたいと思ひます。

今、説明がありました、私には全然分からなかったのですが、今の中で何かご質問、あるいはご意見等ありましたらお聞きしたいと思います。

私が感じたのは、行きあたりばったりではないかという話かなと。本当に共育コミュニティというのはどういうもので、誰のためにやって、どういう活動をするのかという視点がないようで、ここの地域にはコーディネーターが居るから出来ているとか、何のためにやるのかというのが今の説明ではよく分からない。土曜授業についても、私が就任した時から「やって行きましょう」と話をさせてもらいましたが、全然進んでいない。議会でも答弁をさせてもらったが、どういうふうな制度を作っていくのかというのが全く明確でないというのがある。やっぱり制度化をきっちりとしなければ。どういうものを本当に作っていくのか。これなら健全育成会の延長ではないのかな、という話になるのかなという気もしているので、その辺について、ちょっと皆さんにご意見をお聞きしたいなと思います。

米田委員

まず、冒頭の市長のご挨拶の中に「入れ物作って魂入れず」というのがございましたが、確かに私も思うのは、定例会でも発言をさせてもらったのですが、霞ヶ関的な机の上だけではなく、実際の現場に下ろした時に現場はどう動くか、現場のことをしっかり考えた上で作ってもらった方が、現場もやりやすいのは間違いないことではございますが。

また最終的には、先立つもの云々というふうになってこないとも限らず、そのあたりも半分やりながらということも大事なところなのではと思うのですが。ただ、やりたいようにやらせてくれれば、またそれもそれで方向性も変わってくると思うのですが。

市長

もう1つ、紀見地区公民館の範囲というあまりにも広すぎないか、これをいつも疑問に思うのです。旧の国道371号線を挟んで、東側と西側では人口的にもよく似たものだけど、本当に紀見地区公民館だけで対応出来る話かという。あそこまで御幸辻の人は行くのか、柿の木坂の人は行くのか、という問題もあるのかなと思うし、ただ便宜上、公民館単位で割っているだけの話かなと。本当は細かくやろうとしたら、例えば小学校単位でやるとか。学校開放をしようと言っているが、現実、学校開放なんて出来ていない。資料は作れているが、具体的にはどういうものを作っていくのかというのが見えないし、どういう方法でやっていくのかというのが見えない。だから、学校にはスクールボランティアというのが居るはずだから、その人たちをどう活用していくのかもなし、例えば公民館単位でやるのだったら、この目標というの全くない。ただ、こういうのをやっていますというのを並べているだけじゃないのかな。

教育長

自分たちが直面している課題というのが、1つ目は市長が言われた通り、健全育成とコミュニティとの関わりをどう整理していくのかというのが1つあります。これも今取り組んでいるところなのですが、健全育成会議というのは地域から学校へのベクトルの一方であると思います。共育コミュニティは学校から地域へのベクトルもあって、双方向があって、健全育成と合体化していける。だから、健全育成が

持っているベクトル方向はやはり地域や見守り隊であるとかいろんなことで学校に向けてくれるベクトルであり、共育コミュニティは双方向のベクトルであるということ。まず1つは。

次に制度設計に入るのですが、そこで、今 市長が言われた紀見地区のいわゆる地域の広さというのがある、高野口は当初、基本的には高野口中学校を基本に共育コミュニティを行っていたというのが実態だろうと思います。自分たちが目指しているいわゆる共育コミュニティというのは、やはり公民館に1つ置くのが全体を見られるだろうと。ただ、紀見地区・隅田地区では小学校3校にそれぞれコーディネーターが置かれている。特に、紀見地区が3校に置かれているのは市長が言われているように、広範囲過ぎるので小学校に置いた。ところが、小学校だけに置いた場合、今度は中学校が見えなくなって全体が見えなくなる。小学校のパーツだけしか見えなくなる恐れもあるので、今後、公民館にコーディネーターが居て、範囲は広いが、放課後ふれあいルーム等を中心にしたコーディネーターを小学校に置ける。そういう制度を作って行きたいと、紀見地区については特にそう思います。

隅田については、今3つの小学校にそれぞれコーディネーターが居られるので、中学校区全体を見た場合は、やはり隅田地区公民館に1人のコーディネーターが要るだろうと。その後、橋本中央中学校区にもコーディネーターを作っていく。そして、紀見北地区にも作っていく。それと同時に、市長が言われたとおり、学校には評議員が居られますので、学校評議員、この方が運営委員、運営協議会のメンバーになって、いわゆるコミュニティ・スクールが出来れば公民館との連携がより強固になって学校と共育コミュニティとの連携が強度化するだろう、というのが自分たちの見通しです。今、1つの大きなモデルとして自分たちが思っているのは、高野口地区の取組みです。

それから、学校開放については去年も校長とも随分協議をしました。学校開放は、市長からは「まだまだ進んでいない」という評価ですが、私たちとしては、学校開放は進めている気持ちでいっぱいです。確かに門についての協議もかなりしたのですが、「門は閉めさせて欲しい」という小学校からの要望が特に強いという実情があります。中学校はあまりその要望はないのですが、やはり子どもたちを守るという点では。ただ、制度設計を今年中にしていきたい。そして、来年については、橋本中央中学校区に共育コミュニティを立ち上げる。その次は、紀見北中学校区に立ち上げる。それは、先程お話をさせて頂いた通り、学校活性を地域の方々がすることによって地域も活性化するという理念の基で行っていきたいと思っています。これも、教育大綱の最初にある理念と合致することだと思うので、その方向で行きたいと思っていますが、中々、まだまだ具体性という部分では欠けるかもわかりません。以上です。ご意見がございましたらお願いします。

米田委員

共育コミュニティの下にも「地域が支える学校づくりから、地域の繋がりを広げる組織づくりへと」というのがあります。組織づくりというのかどうか分かりませんが、最終的には人と人との繋がりが、今は薄いではないですか。例えば、町内会でも町内会の中に入らないで、それこそ「今はネットにみんな出るから情報もそれ

で十分だ」ということで会費を払わずに、いろんな会に参加して来ないような人がいるといろんなところで話を聞いておりますが、そういった希薄化されているところを、これを1つのきっかけとして、1つの切り口として、あるいは何かお役に立ちたい、時間もある程度あるのでと思っている方々の1つのきっかけになればとか、今まではどうしていいのかわからない人たちにとっての1つのきっかけになればと思います。ゆくゆくは、本当に地域の人と人との繋がりをもっと密にと。簡単にそういうふうを考えているのですが。

中尾委員

先程、市長が「なぜ公民館単位か、いや、小学校単位で良いのではないか」とおっしゃいましたよね。やはり小学校単位、学校単位でももちろんやっても、学校中心だったら、その学校の先生にかなり負担が掛かったり、その熱心な先生がいらっしゃる時には活発に動いても、どうしても人が替わられますよね。そしたらまた違うものになるとか。そういう面も含めて、公民館単位に置いてカチっとしたものを作ってから、小学校単位で活動をするところはするとしていった方が持続するのではないかと思います。それから隅田に限っては、私は隅田に住んでいますので、青少年育成会議と共育コミュニティと今一緒になろうとしているのですが、とても良い流れになっているのではないかなと思うのです。そこに住んでいなかったら分からないこともあると思うのですが、前の健全育成会議のことも知った上で、今、良い流れになっていっているのではないかなと思うのです。本当に市長がおっしゃられた通り、他の人がどれくらい意識を持っているのか、他の人がどこまで分かってくれているのかというところがとても希薄だと思いますので、そのギャップをこれから埋めて行く。地域には、いろんなことが出来る人がたくさんいらっしゃるのです、その人たちとのギャップをいかに埋めていって、一緒にやっていくかというところが課題かなと思います。

市長

僕が言っているのは、公民館という大きな単位でやれば、一部の人の活動になってしまうというのがあるので。僕は共育コミュニティにこだわってはないので、小学校が地域の人を受け入れて、そこでいろいろと協力をしてもらう形を作っていくのが本来の学校の姿だと思っています。この共育コミュニティが、私はよく分からないのです。本来、小学校も避難所になりますから、その中で地域と地域の繋がり、人と人との繋がりを考えて行くのであれば、より細かくしていくのが本来ベターかなと思うのです。しかし、公民館という塊でやっていくと、やはりその辺の名士の方などが中心となり、どれだけ学校単位に下りて行くのかというのが非常に難しい問題であるというのは思っているのですよ。よく分からないのは、では誰のためにやるのかということ。結局これを読ませてもらっていたら、子どものことが中心の活動じゃないですか、どちらかと言えば。地域の共育コミュニティというのに、この事業を見ていたら、この報告書を見たら、子どもが対象のことばかりなのです。それだったら、逆に学校単位でやった方がもっともっと底辺を広げていけるかなと。鶏が先か、卵が先かの考え方の違いでしょうけど。なかなか、じゃあ予算を付けてやりましょうという気にはならないのですよ。

中尾委員 学校の建物は小学校でも良いとしても、やはり事務局的なことは、全体を見ていく事務局の方が良いのでは。

市長 全体を分かる人というのは、誰が居るのか。

中尾委員 コーディネーターですね。

市長 公民館で。

中尾委員 それがこれからの課題ですね。

市長 いや、そこが一番難しいのです。僕はどちらかと言うと、やっぱり小学校単位でやることの方が、やはり地域の人たちにも協力してもらえと思うし、今 現実に登校・下校の見守りもしていただいているではないですか。

もう1つ、共育コミュニティという意味が、地域を巻き込んで本当に地域の人たちに協力してもらって、コミュニティを作っていくのであれば、それで良いなどは思います。

中尾委員 すみません。それでは、小学校を中心にしたら小学校の先生が事務局になるということですか。

市長 いや、それは誰か作らないと仕方がないので。

中尾委員 そうなるのですよね。そこが問題。

市長 結局、一緒なんですよ、頭を作るのは。ただこの資料だけを見ても、議場での答弁を聞いていても、よく分からないのです。それでは、教育委員会は何を作りたいのか。私もここに来て2年ちょっとですけど、教育委員会としてどうしたいのかが全く見えてこない。

米田委員 おっしゃったように、確かに隅田中学校区も「子どもを中心に」ということを書いていますので、それであれば、おっしゃられるような組織の移行ということも確かにと思います。ただ、私がいつも思っているのは、教育というか、福祉というか、そういうふうに専門的な用語を使ってしまっはなんなのですが、「ゆりかごから墓場まで」ではないですが、特に教育の分野も「ゆりかごから墓場まで」、生涯教育の後半の部分を含めて、問題のあるところをそれこそ生まれた時から営業型の家庭訪問をしながら、未然に全てを摘んでいくと。芽が出る前から根こそぎ摘んでいく、そういうのが僕も一番必要だろうと思うのですが。ということで、場所を子ども中心に考えるのか、生まれてから死ぬまでの自分の1つの育ててもらえる場所として

利用をする場として考えていくのか、そういうことによってちょっと変わってくるかも分からないですね。

市長

やはり墓場までいうと、これは例えば、地域の自主防災会を巻き込んだり、老人会を巻き込んだり、その中で一つのものを作り上げたら良いと思います。ただ、本当にこれってどこかにターゲットを絞らないと、本当に、何をするのかとういうのが非常に見えにくい。例えば、本当に子供の貧困についてやるのか、学力アップについても考えていくのか。その辺りが、社会教育・生涯教育まで行ってしまつてとなると、また違うのかなと。現実に子どもの数が減ってきているのは事実だし、そういう中で、この予算は厳しい。また財政課長は嫌な顔をしているが。これが本当に必要なものか、どういう形で教育委員会としてやるか。これには今やっていることを書いてあるだけで、今後どういうものを作り上げるのかというような、きっちりとした目標・ターゲットが明確でないものに予算を付けろという方が難しい。だから、逆に共育コミュニティはこんなものです、こういう形が良いというような制度設計をした中で、ある程度の形で、公民館単位でも良いが、そういうものを逆に、隅田モデルでいくのか高野口モデルでいくのか、そういうものはっきりと出してくれないと、私の立場としては「いったい何がしたいのか、どういうふうにやりたいのか」というジレンマがあるのです。これをやることによって、どれだけの効果が上がってくるのかということなのです。僕はそれが欲しいのです。

米田委員

そしたらどうですか。最初からこのパターンで行くというのも、まだちょっと見えないところもあると思いますが、ゆくゆくはこういう様な考えで、こういうものを作りたいということのスタートとして、コーディネーター、今のところこちらからこの方に、例えば野田先生もそうなのですが、こちらからお願いしますというのが現状なのですが、そういった方々にゆくゆく共育コミュニティをちゃんとしたものに作り上げて行ってもらうがために、そういったコーディネーターの育成、あるいは研修など、まずそういったところから始めていく。まあ、これもお金が要りますが。それから始めていって、彼らとも相談しながら、例えば出張してきてこんな話を聞いてきたよとか、ここはこんなことをやっているとか、いろんな先端的なお話なんかも入れていって。橋本モデルをいきなりポンというのは、なかなか難しいかも知れませんが、そういう予想から始めていってはいかがなものでしょうか。

市長

だから、議会でも答弁したように、やはりそこは制度設計だと思うのです。どんなものを作っていくのかによって、コーディネーターというのはどんなものかというのが出てくると思いますし。ただ、さっきの報告を聞いただけでは、頑張つて予算をつけようという気にはなれない。結局は公民館単位で別々のものが例えば出来てしまったら、「それってどうなのよ」という話になると思うので。制度を作って、その中で、この地域ではここが合わなかったからここを変えましょうか、というなら良いと思うのですが。

中尾委員　　今 活動している「放課後子ども教室」。活動していますよね。そして、土曜授業と言いますか、土曜日のお昼なんかもしていますし、それから夏休みも子どもを集めてやっています。今やっていることをもう少しみんなに認められたものにしていこうということで、今、コーディネーターも頑張っているところなので。こんなことをやりましょうということを市から提案していつているのではなくて、今やっているものの中からそれを広げていこうかなというところですよ。

市長　　それは隅田でしょ。ただ、その他の地域にはないわけです。

中尾委員　　ないかどうかはわかりませんよ。あるかも知れません。

市長　　いろんな教室があるので、これって本当にこんないろいろあっていいのかということ。国の制度を使っている教室だと思うのですが。何かいろいろありすぎて、子どもたちは、「今日はここに行こうか」「こっちに行こうか」それから「学童保育があるから学童保育に行こうか」ってどんどん縛られていつているような気がするし。だから、本当に「橋本市の共育コミュニティ」ってどういう形が良いのか。その制度設計が、ただ漠然としていて、それではコーディネーターを置いてやりましょうかというだけで、1つの政策として非常に難しいかなとは思っています。やっぱり高野口の健全育成とかを見せてもらっても、長い間関わって頂いた方が、ずっとやって頂いていて、またその広がりというのはどうなのかというのを一度検証する必要もあるだろうし、その中で本当に「あそこはやっていて、うちはなぜやらないのか」という議論にならないようにしておかないといけないと思うのです、最初に。だから、予算を付けていくということは、公民館単位で教育委員会がやりましようとなった時に、「どういう形でこの制度はこういうふうにします」「この部分に力を入れます」「ここのこれをやっていきます」というようなことが、まずある程度の、隅田地区にしても、土曜講座にしても26年からやってきているし、そろそろ、これからどうしていくのかという話が出てこないといけないはずなのだが。逆に言えば、1年目が終わったら、土曜講座をやるのが2校・3校と増えていかないといけないのに、現実は何か止まったような、隅田だけが頑張ってくれているというふうなことになっている。これを進めていこうというのが、教育委員会の中には見えてこない。本当に何をやりたいのかというのが僕には届かないのです。だから、厳しい財政状況の中で予算を付けていかないと言っているのではないのです。それに対してきちんと制度設計が出来て、効果が見えてくるものであれば予算を付けたら良いと思うのですよ。だから、さっきの予算の中で質問をされていた家庭教育支援の予算というのはヘスティアの予算で、国のお金です。それはヘスティアに限ったところの予算なので、それは、まだまだ私たちもその部分についてはこれから作り上げていこう、「ネオボラ」もやろうかなと思っていて、福祉の中に「ネオボラ」を作るというのもやり、そことの連携という形で、そういう福祉と教育の連携及び強化をしていく。やっぱり室を作った以上は、室長を置かないと動かないというのがはっきりと分かったので、1人囑託を入れようかなと。やっぱり引っ張っていく

人間というのを作らないと動けないというのがあるので。

どうですか、清田委員。

清田委員

私が思うのは、教育というのは多様なもので、やはり総合的にやっていかないといけないと思っていますし、ただ考えていく時に、どんな力が橋本にあるのかというのを見たら、現に動いているのはいっぱいある。先程、単なる趣味の会ではないかというニュアンスの話もありましたが、そういう力が大きくなってなくても、個々にはより力が集まっているのが橋本だと思っているのです。それで、学校との繋がりに関しては、学校には力の足りないところもあるし、地域からの支援を上手く使っていったら良いのではないかという声が大きくなってきている中で、地域と学校とをもっと繋いでいこうと。そしたらその時に、地域にはどんなものがあるか、学校の要望としてはどんなものがあるのかというのがお互い分からないといけない。それを学校だけでは先導的に引っ張っていくことはなかなか出来ないで、地域と学校とが合わさってというか、協力し合いながら、お互い育とうというのが共育ですよね。これは別に橋本で起こっている言葉でもないわけでしょうけど。そういうところを上手く繋いでいくという役割を担う人も必要であろうというのが、コーディネーター。このコーディネーターは、色々なコーディネーターが考えられると思います。例えば、学校で何かをするためにその人材を探してくるというのも、小さな意味のコーディネートですし、もっとこれから力のある人がコーディネーターをやるようになったら、地域と学校とを本当に総合的に繋いでいくような役割が担える人も出てくるかも知れませんが、少し話が皮肉っぽく出たのは、年配の力を持った人が牛耳るような地域社会があるかも知れないが、今はもうそういうふうな時代からどんどん変わってくる、その経過途中だと思うのです。その中で「共育コミュニティの現状」というふうに書くと、時系列的に書いている感じだけなのですが、この時系列の中に発表の問題等があるので、市長に伝えたい気持ちは何なのか言われますと、本当に反省すべきところだと思いますが。こういう時系列では実績としての重みになってきて、どういう場所ではどんなことが実際に行われているのかということ考えると、今ぽつぽつ出ているのは高野口で、1つのモデルであるかもしれない。紀見東中学校区でもそれなりの動きがあって、そこの校長があやの台に行くと、当然地域性が違いますから、違う要素を入れてやっているとか。それから紀見から三石へ。あまりこういうことを細かく言うのも何かと思いますが。どんどん、その地域のモデル的なことを校長がやり始めていると、私は実感しています。それは地域と学校が繋がっていく、土曜日も開けないから開かれてないのかということ、そんなことはないだろうし、門はどんどん開いてきているというふうに認識をしています。だから、私はこの会は教育委員会の考えを市長に伝えられないということであれば、仕切り直しと言いますか、予算の話だけでもないと思うのですが、学校というのはかなり長い時間をかけて変化をしてきているというふうに私は思っていますので、教育委員会事務局も、もう少し市長に丁寧な説明が必要かなと。

元々、市長が前で言われるように、教育に関しては市議の口から相当物申しているというふうなことであります。丁寧に説明したらすぐ市長に伝わるように思い

ますが。

市長

僕は、高野口にはああいう熱心な人が居るから高野口の部分というのが動いているのだと思います。そこに若い人たちが入ってきたら、もっと良い組織になる。というのは、清田委員がおっしゃったこと、まさにその通りなのです。ただ、このまま漠然と、そうしたら共育コミュニティはどういう形で進めていくのか、ある一定の指針を示してあげたら、コーディネーターも動きやすい。どういうことをしたら良いのかというのが分かりやすいというのがあると思うのです。だから、学校が中心でやるなら学校単位でやらないといけないし、地域でやるとなると、なかなか、どうにも公民館でというと、そういう人材を逆に見付けるのは非常に大きすぎて難しい部分もあるのかなと。よっぽどリーダーシップがないと引っ張って行くのは難しいなど。それだったら、もう1つの制度を作って、まず、こういう形で「橋本市の共育コミュニティ」というのを進めていくという方針を出してあげた方が、逆に公民館単位でも作っていきやすいというふうに思うのです。1個ずつ積み上げるとなるとやはり時間もかかりますし、やはり共育コミュニティというのは「橋本市はこういう形で進めていく」という統一的なものを作って、そして保管する部分は、この公民館ではこういうことをやりましょうと。やはり古い地域と北のように振興住宅地のような所とは基本的には考え方が、そんなのうちには関係ないよという人も居るし、隣同士が話をしないという地域もその隣にはあったりするので。僕は、職員にもいつも言うのだが、最初から100%なんて考えなくて良いと。まず、どうやって動かすのかということは今考えろと。高齢者のああいう会のような総合支援事業の中でも、担当にはいきなり100%なんて考えなくていいよと。まず、そこから動かすことから始めていけと。そして、そこから積み重ねていったら良いのだと。どこからやっても時間がかかるのですよ。高齢者でもなかなか難しい。「元気ラリー」に来る人は他に来なかったり、「ふれあいサロン」に来る人は「元気ラリー」に行っていなかったり。なかなか一本化出来ないわけですよ。今言っているのは自主防災会を巻き込め。自主防災会を巻き込んで、災害訓練の時に老人の居場所等をつかむことを考えろ。そしたら、自主防災会を巻き込んで、老人会を巻き込んだら、動くじゃないですか。災害にかこつけて、人を集めてもいいわけで。ですから、そういうふうに複合的にものを動かしていく、1つが駄目なら、2つ考える、駄目なら3つ考えて合体させてやれというふうな。僕はそれが一番早いのかなと。それだったら、まず本当にやりたい事、共育コミュニティで何を解決するのか、何を目的にしてやるのかというのをもっと明確に出してあげて、それからやっても出来上がるスピード感というのはこちらの方が早いのではないかなと思います。

清田委員

「福祉との連携」というので、福祉というのをどういうふうに考えるのかちょっと分かりませんが、高齢者問題というふうになっているのか、それから健康福祉推進都市として、他のところがやっているのか。

市長

「福祉と教育の連携」については、まず子どもです。まずそこからやっ

と。これを生涯教育まで広げたら恐らくまわらなくなると思いますし、まず家庭教育支援を、この大綱づくりの時もしていかないといけないという話があった中で、まずこども課と社会教育課に今やらせていますが、ただこれは当然健康課も入ってくる問題ですし、教育委員会も入ってくる。ひょっとしたら「子どもの貧困」という部分になれば、学校教育課、教育相談センターというのが連携してやるというのが大事だと思います。ただ、小学校とか中学校に行った時はやっぱりメインは教育委員会が中心の活動をして、貧困の問題については福祉課と連携しながらやっていくということになってくると思うのです。そんな大それた全部のところまでやろうと思っても出来っこないので、そこはそこで、まず家庭教育という部分で、赤ちゃんが出来てから高校卒業ぐらいまでの連携というのが大事なと。いろいろ情報交換というのが、どういう家庭がとなった時に、例えば生活保護を受けないといけない状況になったら、福祉と連携しないといけないという部分が絶対必要になってくると思いますし、あまりにもネグレクトとかそういう育児放棄があるのであれば、福祉と連携して育児の相談をしないといけないという繋がりが重要だと思うので、なかなか高齢者までいくと手がまわらないような気がします。

清田委員

高齢者の健康・貧困問題なんかは、まさに子どもと高齢者との繋がりで、すごく近い関係にあるというような認識でよろしいですか。

市長

いや、そういう認識は持っているのです。だから、高齢者の部分については福祉部内にチームを作らせて、福祉課やいきいき長寿課、福祉部の中でその対応をチームを作ってやりなさいと。やはり必要な時は政策企画室が入るか教育委員会も入って、そういうふうな連携を当然していくことになるので、1つの課で解決が出来る程の単純な問題はないと思っているので、そこはそこで、高齢者はまず福祉部の中でしっかりと連携でやりなさいと。だから、そういう必要性というのはずっと考えていて、単独で解決出来る問題ではないというのが僕の基本的な考え方で、その都度その都度連携をしっかりとしたら良いと思うのです。共育コミュニティでも老人と子どものふれあいをしようと思ったら、老人クラブに声を掛けて誰かに行ってもらおうとか、というのはいきいき長寿課が連携をすれば良いと。だから、共育コミュニティでも結局はしていかないといけないが、ただ、今回作った家庭教育支援室の連携というのは、あくまで子ども中心で考えているので、そっちの方は森中部長と石橋部長がしっかりと高齢者と子どもの交流というのは、そこが調整をしたらいいだけの話になってくると思います。

教育長

共育コミュニティの話で提案させてもらっているのですが、図式で言うと、まさに隅田中学校区のこれが図式です、基本的な図式は。目的というのはそこにあるように、先程からのお話にあるように、「子どもも輝く、地域のいろんな人も輝いていけるようなシステム作り」というのがそれぞれの共育コミュニティであって、中学校区にはそれぞれの特徴もあります。それから歴史的な過程があり、この平成20年から共育コミュニティが出来てきて、それで学文路地区に出来て、紀見地区に出

来て、今、隅田地区に出来て、いろいろと出来てきています。その出来方がそれぞれの校区によって違うので、整合性を一定取らないといけないという部分があるというのは確かにあります。その整合性の結論として、今、隅田中学校区の共育コミュニティの図式を書いて頂いたのが、まさにこれだと。そして、高野口が今これに合わそうと、こういう形になろうとしています。去年は井澤先生がコミュニティのコーディネーターをして下さって、今年は野田先生ということで、特に健全育成会との整合、そして、学校との交流のベクトル、片方だけのベクトルではコミュニティになりませんので、地域に繁栄していくような取組み、今、応其小学校なんかもそういう取組みをして頂いていますし、高野口小学校もそういう取組みをして頂いています。また、高野口中学校の図書館の整備とか、その他、学力補充とかも、このベクトルの中で取組まれています。ただ、市長がおっしゃるように、自分たちが制度化するところをもっとはっきり提案していかないといけないという宿題は、私たちは感じています。

それからすべての地域にこれを作る。これが先程論議されていたような「高齢者も含めた生きがい作り」にも繋がっていくものだと。だからそういう意味で言ったら、橋本市の非常に大事な「教育的な取組」のとても大きなことではないかと。子どもも輝き、地域の方々も輝く。特に少子高齢化・核家族化の中で、この共育コミュニティが果たす役割は絶対に大きいはずなのです。あとは、少し市長も懸念されていたように、人材の部分はどうするか。しかし将来的に、私は、人材は出てくると、今出てきていると思っています。やってくれている人は随分居る。学校活性化のために地域の人々との繋がりを持ってやっていける人はかなり居ると思いますので、制度化については、今年10月ぐらいまでに制度化をしていきたいなと思っています。提案は、またさせてもらいます。まだきっちりとした制度化になっていないので、市長の言われる部分もよく分かりますので。

市長

高齢者まで入れるのだったら、当然この中に福祉部のどこかが関わらないと、そういう部分ではうまくいかないかなと。見ていたら子どもの関係が非常に多いので、ここから高齢者へどう繋げるのかということなので。

教育長

教えるということは、ただ単に教えるだけではないので。例えば、地域のお年寄りが子どもにいろんなことを教える。これは学びを伝えるということになると思うのですが、これが単に学びを伝えるという評価で終わるのではなくて、やはりその人の生きがい作りに必ずなると思うのです。それは生涯学習推進計画の中にも記述されていることですので、ここの部分も大事にしていきたいなと。そういう場を大事にしていきたいなと。そして、子どもも教わることによって、やはり優しさも含めて知識も増えてくると思いますので、このベクトルを必ず教育委員会としては構築していきたいなと思っています。

市長

まず1つに、よくわかるのですが、「出てくると思います」と言われて「そうですか」というのも、やっぱり逆に言うと、井澤先生のようなOBも居られるし、校長

先生や教頭先生、退職された人も居られるわけだから、そういう人たちを、学校のことを一番よく分かっている教師のOBなんかを、なぜ取り込んでいかないのかということをもっと不思議に思う。そこがどうなっているのか。その辺をもっと取込めていけば、もっと土曜授業でも「もう一回、勉強を教えたってよ」というようなことになるかも知れないし、それがNPOを立ち上げて、有償ボランティア的なものを作るといことも出来るのかなと思う。

ボランティアの人材がどの程度居るのかというのを、教育委員会は把握しているのですか。辻脇君。

学校教育課長

はい。

ボランティア人材につきましては、たくさんの方が入っています。例えば、最近で言えば、防災関係で区長やいろんな方が入って、活動をかなり連携してやっていただいています。図書ボランティアは長い間入ってきて頂いていますので、それぞれのところで、総勢で30～40名くらいになるかと思いますが、年々変わりますので、きっちりした数字等は分かりませんが。あと、放課後のふれあいボランティア関係は社会教育課で、県内で一番たくさん放課後ふれあいをやっています。人数が何人かまでは、私には分かりませんが。

市長

結局、昔はスクールボランティアという制度があって、登録をしてもらっていたのだが、使わなかった。登録してあっても居るだけで、使わなかったという事実もある。学校の先生方が嫌がったという部分も昔はあった。今は知らないけど。そういうところの人材活用というのを、やっぱりもっと「こういうボランティアをやってくれないか」という働きかけを何かやっているのかなと思う。特に学校関係は。

学校教育課長

私は教育行政に12年居るのですが、この10年でかなりそういう人材を要請する回数というのは増えました。ただ、うちの市でやっている人材ボランティアのシステム自体があまり上手く活用されていないという実態は確かにあるのですが、今で言えば、学校長が、教頭が直接声を掛けながら地域の人を集めているという状況はたくさん見られます。行政関係の方も役所関係の方もたくさん事業に入って頂いて、「命を育む授業」であるとか、「ガン教育」であるとか、というふうな形の、行政関係の方もたくさん入って事業にも関わってくれるようになったと思います。

市長

だから、そういう人材とか使ったらいいじゃないか。もっと積極的にボランティアをしたいという人に話を聞いたら、登録をしても全然使ってくれないとか。うまくマッチングしない部分も確かにあることはあるのだが。うちの場合は登録者がちょっと減ってきている。中々、そういう面での使い方が、教育委員会だけと違って他の部もそうなのだが、せっかく登録して頂いても上手く利用できていないのではないか。大体そういう人って、頼んだら「やってみましょうか」ってなるでしょう。スクールボランティアに登録している人なんて、そういう人材というのが結構居るのではないかなと。

米田委員

ボランティアもコーディネーターも一緒かと思うのですが、それこそ公民館単位、あるいは中学校単位となると、コーディネーターやボランティアの方も活動エリアがかなり広いので、二の足を踏むというか、どうすれば良いのか分からないということもあると思うので、それだけの人数が居るのであれば、それぞれのところに文書みたいなを作って、それぞれの所に班長さんみたいなボランティアあるいはコーディネーターみたいな人を置いてくれた方が、もっと小回りが利くだろうし、もっと頻繁にいろいろと活動しやすいですよ。

市長

今、職員に言っているのは、もう職員だけで何かをしようと思うなど。地域の人たちに協力してもらわないと、まだまだ職員を減らしていかないといけないのに、自分達で全部仕上げようなんて言っても無理。市民共同という言葉があるように、その中で協力してもらって体制づくりというのをやはり進めていかないといけない。マラソン大会だってそうでしょう。結局はボランティアに大勢来てもらって運営をする。確かに市の職員も多いが、それでやっているわけじゃないか。だから、そういうボランティアをしてもらうためにも早く「こういう形で橋本市の共育コミュニティをします」という制度設計をしてあげたら、逆にやってもらえる、やってもらいやすい部分が出てくるのではないかなと思うのだが。今だったら、雲を掴むような話で、何をしたら良いのかというところなのではないか。コーディネーターもかわいそうだなと思う時がある。結局、何をしたら良いのだろうか。

教育長

いいですか。

1つ、コーディネーターのお話が出ましたので。やはりコーディネーターは、地域に根差したコーディネーターをお願いしていくのが良いと思っています。例えば隅田なら、隅田地域の人材とかボランティアをご存じの人を。学文路が上手くいかなかった、学文路のコーディネーターが定着しなかったのは、地域に根差した方ではなかったということ。それから、高野口については地域に根差した方がコーディネーターをやってくれているので、徐々に徐々に高野口の共育コミュニティは形成されてきていると思っています。高野口の共育コミュニティの今後の課題は、健全育成会とのコラボレーションをどうしていくか。かなり健全育成会の力がありますので、それと一緒にやっていく。隅田は今、共育コミュニティは健全育成と一緒にやっっていこうとしている。紀見地区は今、小学校ごとにコーディネーターを置いています。このコーディネーターを統合して、紀見地区の健全育成とのコラボが出来る公民館単位のコーディネーターが必要である。それから、橋本はこれから橋本中央中学校区になるので、校区がかなり広がるので、やはり公民館、学文路地区、山田地区、橋本地区の公民館において、それぞれの健全育成が3つありますので、それともタイアップをしながらしていく。最後は紀見北地区という形で、制度設計をもう少し具体的にしていきたい。ただ、コーディネーターは地域に根差したコーディネーターが必要であろうなと思っています。市長が言われる通り、退職された先生方がイメージとしてはこれから出てきます。今も居られるのですが、上手く活

用が出来ていない。しかし、井澤先生や野田先生の活用例があるように、そういう方を活用していくという制度設計になると思います。共育コミュニティには力を入れていきたいと思います。

市長

森田委員、一言もしゃべっていないのですがどうですか。

森田委員

私はどの立場で話せば良いのか、というのがすごくありますが。コミュニティに関しては何年か前にコーディネーターをさせてもらったことがあり、その時の話で言うと、殆ど高野口中学校を拠点としたところの高野口のコミュニティでコーディネーターをさせてもらったのですが、いろんな人材の派遣という面を考えると、やっぱり公民館との連携がすごくいるかなと。殆ど、学習支援という形では、高野口中学校に入らせてもらっていたのですが、その時に、「こんな部分を教えてもらいたいのだけど」と要望があった時に、じゃあどうしようかといった時に、全く持っている駒がなかったという時に、やっぱり公民館と連携をしていくのが、そこを強化していくのが大事じゃないのかなというのを感じました。私はまた、地域では一ボランティアとして畑や田んぼを貸出していますので、やっぱりそれで地域の住民の一人としては、小学校の子がおじいちゃん、おばあちゃんというか、その地域の人たちと触れ合うことで、いろんな子どもが居るのですが、そこで地域との繋がりが持てる。今度出会った時に、「あ、おばちゃん、おじいちゃん、おばあちゃん」という関係を持るところを見ると、先程お話されていましたが、そこが高齢者と福祉の関係ではやっぱり「畑に行かないといけない」「学校に行かないといけない」という、それが生きがいになっているのではないかなというところも感じています。先程言っていました、福祉と教育の連携の部分ではやはり、あの部屋が出来てから私自身、ヘスティアの会長として話をさせてもらうのですが、やはり福祉と教育の連携というのがより強固になってきたのではないかなと思います。福祉の方がヘスティアってどんなグループというのが分かったことで、今までも連携を取っていたのですが、より深くなったのは「こんなお家にヘスティアの役割分担で、ここへ行ってもらえませんか」と家庭訪問に行く件数等が増えてきていますし、私たちの講座で「もうちょっと相談したいよ」という方が現れたのですが、「じゃ、どこでしょうかな」という時に、あの相談室を使わせてもらって、やっていけているのではないかなということも出てきています。こんなふうに部屋のこととか連携とかを言ってくださったので、そこは私も初めて福祉部長さんとお会いすることが出来たというように、人と人との繋がりはだんだん強固になってきているのではないかなと感じています。

ありがとうございました。

米田委員

確かに、今、森田さんがおっしゃったみたいに、小さい時はいつも誰かに守られている、誰かにいつも気にかけてもらっている、愛されているというのがやっぱり必要だろうし、また歳をとってきても、生きていく生きがいとして、誰かのお役に立てているというのが自分の生き様を肯定しているつもりである。それをマッチン

グする場所としても、双方向でばっちり合います。

市長

僕は、本当に公民館単位で公民館を活動拠点として逆に機能出来るのか、という心配がします。すごく。あれだけサークルが多くて、それだったら、逆にどこかの空き教室、そこを拠点にして公民館と連携しながらやる。空き教室を使うと言うと、教育委員会というより学校側も「空き教室なんかありません」という反発が強いのですが。学童保育でも、なかなか何のために教育委員会に持って行ったのかという理解が学校にも無い。学校には先生もいるし、自分の学校の児童ぐらい自分の学校で面倒を見なさいよと。学童保育がどんどん増えて来る。でも、新しく施設を建てるという方針は無いので、空いている教室を活用するというふうな形になると、とてもじゃないが追いつかない。本当に、もっと教育委員会と学校が本気になってこれをやってくれるという姿勢を見せてくれないと。何かをやったら、「うちでは無理です」と、そういう話も多いので。

僕はより良いものを作ってくれたら良い。教育委員会としてこれはメインの政策でやっていくというのであれば、やってくれたら良いのだが、もう少し本当に公民館単位でもいいですから、その中でどういうふうなものに作り上げていくかということ。議会の答弁を聞いていても、行き当たりばったりのような、ここは上手くいっているがここはありませんではなくて、平成20年からやっているというのであれば、もう各公民館にある程度の形が出来ていないと。「そんなのらりくらしやるのか」って思うところが僕の中にはあるのですよ。何でそこまで時間が掛かるのか。もう平成28年だよ。8年でまだ出来ていないところがある。人材が居ないなら、「本当に本気で探しているのか」というのが僕の中にはあるのです。そこに何の問題があるのか、どうして広まらないのかという話。ただ人が見つからないというが、コーディネーターが見つからないというが、「本当に探しているのか」って思う。だから、これをやっていくと平成20年から取組んでいっているなら、本来の姿として、逆に出来ていないといけない。「まだ今か、まだなのか」という感じしかしないわけなのですよ。

中尾委員

今だからこそ、いよいよというような状況になっている。

市長

だから、僕が言っているのは、「これ以上時間をかけずにやれよ」ということを言っているのですよ。

教育長

コーディネーターをお願いをするというのは、ある意味お礼というか謝金というか、この部分で言うと、今総額で90万円、100万円近い、県と国と市で30数万円ずつで100万円というコーディネーター料なのです。100万円を、例えば4つに分けると25万円という金額になる。今までやってくれていた人たちは、殆どボランティアでやってくれていたと思います。それをなかなか頼みに行きにくかった、というのが正直なところでもあります。これは正直なところですよ。それをも

っと分けていくと、1ヶ月1万円もないようなコーディネーターのお礼ということになるので、来年度については制度設計をして、予算要求をして、3分の1でするので、それに見合うような制度設計でコーディネーターを頼みに行きたい。ただ、出来たら一挙に全てやりたいのですが、全てやると社会教育課や学校教育課で支援をしていかないと立ち上げが難しいので、バーンっと任せるわけにもいけないので、1つ1つ丁寧にいきたいというのが正直なところですが、市長が言われている「それが必要だというなら一挙にやれよ」という、その意味もよくわかりますので、ここは検討をさせて頂きたいと思っています。今は橋本中央中学校区に来年置きたいと言っておりますが、残った紀見北地区も一斉にやれたらやりたいなど。やってくれそうなコーディネーターの人材は居られますので、それにも当たって行きたいと思っています。

市長

必要なものだったらやったらいいということ。お金がないからこのまま進まない、頼みに行けない、いつまで経っても出来ないというのであれば、こんなの議論しても時間の無駄です。だから、ここに出してくる、僕が入っているということは、教育委員会として僕に「予算措置をしろよ」ということを言っているのだろう。だから、今日はこれを辻脇課長が出してきたのだろう。これをテーマにさせたのではないか。こんな議論するだけだったら、やらない方がましだよ。こんなのは、やるかやらないかのどちらかではないか。予算が付かないなら、やめてしまったら良い。国・県3分の1ずつ出してもらったところで。でも、これがこれからの地域にとって必要ですよというのだったら、僕にそれだけのことを見せてほしい。逆に、これがこのような状態で、するかしないかよく分からない話をしているのであれば、私は教育相談センターにもう1人、人を付けるよ。あれだけ学校に行かない子どもが増えてきて、原因も分からないような問題を抱えているなら、ここに30万円付けるなら、教育相談センターにお金を付けてあげた方が子どもためになるじゃないか。それで、もう1人、人を入れてあげたら、それだけの対応が出来るじゃないか。学校教育課も楽になるじゃないか。だから、少ないお金の中で、どこかにお金を投入しないといけないなら投入をしたらいいんだよ。この前の教育委員会の会議の時でもあったが、どんどん増えてきて教育相談センターに負担ばかり掛かっている、そういう現実があるではないか。それだったら、そこにお金を100万円、150万円、「臨時で1人入れてあげるから、そこにお金を付けなよ」と財政課長に言った方が、逆にこっちの問題が解決出来るかもしれない。まあ、お金だけでは解決出来ないけどな、センター長。それは分かっているのだが。うちも、教育相談センターに任期付きの職員を入れたではないか。それは、必要だということでみんなが力説してきたので、分かったと、予算を付けた。育ったら出て行くということがあるので、任期付きの職員を付けたわけではないか。だから、本当にこれが必要だという情熱を全く感じないのです。これをやろうと思うから予算をいくら付けてください、という話を聞いたことがない。予算を付けるなら、やはり、こういう制度で、こういう形で、こういう地域ごとに、こういうふうにつけていく、とならないと。やっぱり熱意が感じられないと予算なんて付けていけないよ。厳しい中で。でも、必

要なところは付けていっているではないか。就学援助でも予算をカットする予定だったが、カットしないで、どうしてもこれが必要だということで、僕は残したではないか。今回、予算削減提案が上がってきたが、これは残さないといけないだろうということで、カットせずにこのまま行っているだろう。それと一緒に、これは「これからの将来についてやっぱり必要だから、これだけの謝金を用意してくれ」という話であるなら分かるのだが、そのお金がないから頼みに行けないとなるなら、この話って、結局何も前に進まない。それだったら僕がこの会議に入る必要ないよ。皆でまとめてくれて、話を聞いても良いぐらいではないか。だから、もっと「これをやりたい」という提案があって、これはこうしてって、それでこの会議が揉むのであれば意味があるものだと思うが、制度設計もなしに、ただ高野口はやってる、ここはない、でも人は居ない、そういう話を聞いていても、この会議の意味ってないのではないのかな。逆にこの制度設計をしてきて、この会議の中で、これはこうやったら良いのではないかなと積み上げていって、ここでそういう議論をする場じゃないのかな。だから、どうもよく分からない。全然熱意が伝わって来ないのですよ。この会議の進め方も、もう少し研究をして、これが教育委員会での会議があるなら「これは必要なので」ということで制度設計を早く作ってくれて、その中でもう一度議論をする。「例えば、この制度でいくのはどうですか」という議論を普通はすべき場所ではないのかな。教育をどうしていくのか、共育コミュニティをどうしていくのかという話になるのであれば、教育委員会としてはこういう制度を考えていて、こういう形で何年以内の間に全中学校区、公民館単位で完成させたいという話でくるなら分かるが。教育委員の皆さんの意見と、僕はその予算を付ける側の人間、執行側としては、やっぱりここへ出してくるということはやりたいはずだと。僕は議会答弁でも言ったよ。「制度設計さえ作れば予算付きますよ」というのは市議会の議場で、一般質問で答えているではないか。だから、この会議の進め方も、財政状況の説明など要らない。

教育部長

私もまだ日が浅いのですが、先日から光市の共育コミュニティで文教厚生委員さんから聞かせて頂いて、やはりあそこを見ると、よくやっているなど。地域の密着とか教師も校長先生もいろんな方たちがすごく活発に動いて頂いて、やって頂いているなどということが分かりました。

本市の場合とはやはり地域性など違うところがあるので、単純には比較は出来ないかなと思うのですが、そのあたりも参考にしながら、私たちから立ち上がっていけるようなところも出していきたいと思います。

市長

ここは、やはり制度を動かす時に議論する場所だと思って、教育委員さんに出てきてもらって、教育長も居て、みんなが入ってやるのなら、これを「橋本市の教育」を変えて行くために、ここの部分にこういう制度でやりたい、というふうに逆にそっちから提案をしてくれた中で、こういう制度設計の議論を皆さんとやるのだったら意味があるが、何か漠然とした形でこういう議論ばかりしていても、教育委員さんと僕の立場は違いますから、僕はこれをやりたいから今日はこれを議題に挙げて

くれたと思っていましたし、議場でも、制度設計をしてくれたら予算を付けますよ、という話を、もうしてあるではないか。その中で制度設計はどうかという話をしたら、全然進んでないわけでしょう。この資料を読んでいたら、今日はどんな議論をするのだろうかなど、内心分からないまま来ている。本当にやるならやるで、これは議会答弁した以上、制度設計をまず作ってくれたら、俺は予算を付けますと言っているのだから、それはそれで教育委員会の中で、まずこういう形で進めていったらこれだけの予算がかかります、というのを出してくれたら良いのではないかな。その中で、人はどう集めたら良いのかとか、どこを拠点にしたら良いのか、どういう活動をするのかというのを逆に提案をする。僕は議場で承認したことだから、自分でやると言ったことだから、そういうものが出てくると思ったのだが。現状を聞いていても仕方がないし、それよりも現状で言ったら教育委員さんの方がよく知っているだろうし。だから、こういうのをやります、やりたいというのを意思表示してくれてやった方がより実のある議論が出来るのではないのかな。

教育部長

形だけの会議にならずに、次回は具体的な内容の提案が出来るようにしていきたいと思っています。

市長

これは何回開いても良いわけだから、日程さえ合えば出てきてもらって話をすればよいだけの話なので。この会議自体が本当にどういう会議かというのを、やっぱり教育委員会の中できっちり詰めてもらって、これはこの制度を動かすためにはどうしたら良いのかという会議にしないと。教育委員会として、こういう制度設計がありますと、やっぱりそういう会議にしないと。総務部長は関係ないのにずっと座っているだけで、財政課長もそうだが。やはり、そういう予算を付ける議論だったら、総務部長も財政課長もここに居てもらったら2度も説明しなくて良いので楽だし。「財源を作れ」という話も、何々で稼いでこいという話もしないといけないし。そういうふうに、この会議はどういうものにしていくのかというのをもう少しね。何か中途半端なことで始まっているから、そういう会議は教育の会議なのだから、その中で橋本市の教育として、どういう教育をもっと進めていかないといけないのかということです。一応、子どもの連携はやるようにはしたし、ネオボラという高齢者の子ども版のような統括支援センターみたいなのを今作ろうと。そしてそこ連携をしよう。引っ付けてやろう。そのために保健師を1名募集したし。そういう会議にしませんか。

教育長

今 市長が言われたように、提案型というか、きっちり提案してこうしますというふうな会議に次回からはもっていききたい。次回は、共育コミュニティについては制度化を必ずして持ってきます。私達は、この共育コミュニティが地域活性化と、やっぱり子どもたちの輝きというものを生むものであると堅く思っていますので、実行をしていききたいと思います。今日はいろんなお話の中で市長がかなりお話されていたのですが、その中にもやはり連携というのがかなりあって、今「橋本市の教育」の中にも、学校教育課とか、社会教育課とか文化スポーツ室とか、公民館とか、

すべて連携で進めていくというのが本年度からの新しいスタンスです。共育コミュニティも連携ですので、これについても力を注いでいきたいと思っています。次回については、より提案型の、お互いの提案が出来る、議論が出来るような素材を準備して開催したいと思いますので、宜しくお願いします。

教育部長

市長、議事の進行ありがとうございました。委員の皆様、どうもありがとうございました。

次に議題の5 「その他」ですが、何かございませんか。

無いようでしたら、事務局からですが、次回の日程なのですが、いつ頃がよろしいでしょうか。

それでは、次回の総合教育会議につきましては、定例に開催しますのは、今年は本日を含めて2回程度ということで、次回10月頃の開催でいかがでしょうか。

10月頃で、また予定については事務局で調節をさせて頂きたいと思います。

それでは、本日の会議はこれで終了させていただきます。どうもありがとうございました。

全員

ありがとうございました。

(午前12時20分)